

考えるというよりも、その歴史的伝統性のなかに位置づけて把握してみようとする態度の見える点で注目される。

討議においては、この問題をめぐってその具体的論証はいかにして可能かという点に、意見は集中したように思われた。森朝男からは清水の表現史に対する方法のもつ不明晰性についての疑義が提出された。また、高野に対しても同様に高野の想定したへ口承の語りが実際どのようなものであったのか、とする質問がなされた。この口承の語りの問題は虫麻呂長歌の段階に、そうした状態を高野自身報告の際に想定したわけなのであった。しかし、あいまいな点を残しているために、高野からは議論がなされていない。

*
結局、両者による報告に対する質問と討議の過程のなかで、最も追求された問題であって、同時に最も期待された問題は虫麻呂長歌の表現史的位置付けということに尽きるであろう。事実この問題をめぐって様々に質問もなされたのであった。しかし、表現史の方法をいかにして構築すべきか、その方法に従って長歌史を分析した際どのような光景が見えてくるのか、そのなかで虫麻呂長歌はどのよ

うな位置を得るのか。すべて不鮮明なままに終わったという印象が残った。

その原因は、古橋の言うように「読みの方法が確立していない。」ということと同時に、文学史にあらざる表現史とはいかなるものなのか、ということが筆者をはじめいずれにおいても不明確であったといわざるをえない。表現史なる方法はそれだけあたらしい方法なのであり、その方法を模索し、追求しただけで断念せざるをえなかったというのが実際であった。

セミナー委員の企画としては「言語表現それ自体に内在する力学」をどう把握するかを課題とし、従来の文学史とは異なるところの表現史の方法の可能性を探ろうとしたのであったが、報告と討議を通じて明らかになったことは、こと古代文学に関するかぎり周囲にある様々の要素や条件を取り除いて「言語表現」それ自体を取り出す、と言った時の果てしない不可能性であった。虫麻呂長歌の表現史的位置付けが困難であったのも、その問題と不可分ではなからう。

(保坂達雄)

C 「世間の住まり難きを哀しむる歌」をめぐって——漢詩文と出逢う和歌

表現史としての「哀世間難住歌」 辰巳 正明

手束杖 腰にたがねて か行けば 人に厭はえ かく行けば
人に憎まえ 老男は 斯くのみならし たまきはる
命惜しけど せむ術も無し

〈老〉は〈醜〉を肉体的にもつことによって嘆くことになる。しかし〈老〉が〈老醜〉として現われることはある特殊なことであ

る。一般的に見れば、〈老〉は「事も無く生き来しものを老奈美にかかる恋にも吾はあへるかも」(四五五九)との如く〈老〉を迎えて〈恋〉をする喜びがあるように、〈老〉は積極的な方向に向かっているし、また「於岐那とて佗びやは居らむ草木も木も栄ゆる時に出て舞ひてむ」(『続日本後紀』)では、〈老〉は〈佗び〉て居ることを否定し草木と等しく〈老〉の栄ゆる姿(舞ひてむ)を見出している。この〈老〉の姿は竹取翁の歌と九人の娘子とのかまけの歌に見る老翁の姿とも重なる。あるいは人名に見る〈老〉や「古老相伝」という〈老〉なども等しく肯定的(積極的)に見つめられている姿だと考えられる。謂わば〈老〉は〈老醜〉であるよりも社会的には肯定的に位置づけられる何等かの意味性を有していたと言うことに他ならない。その意味性とは祝福されるべきものとしてある〈老〉にあり、共同体の長老や知恵者、時には神として現われることにある。一方、律令には労働力に換算された老の規定を見るが、しかし「凡鰥寡孤独、貧窮老疾不能自存者、令近親收養。若無近親、付坊里安恤。」(戸令)という救済が見られ、国司遣行条では「問百年」と見える。百年を問うとは『礼記』王制の「問百年者就見之」による。律令(儒教思想)の制度が〈老〉を内包する思想として定着する。

このような肯定的な〈老〉の姿は、『詩経』に数多く見える〈寿老〉と言う喜ばれる〈老〉の姿と類似する。「寿老万年ならん」(小雅)「寿考にして且つ寧し」(商頌)などの示す〈老〉は、祝福されるべきものとしてある。藤野岩友氏はかかる「寿老」の背後には天折や不慮の死が多くあり、長生が現実には叶わぬものであることから〈老〉が祝福されるものとしてあったと言う(『中国の文学と

礼俗』)。そのような〈寿老〉の思想は「韓詩外伝曰、斉桓公見畝丘人曰、叟年幾何。対曰、臣年八十三矣。公曰、美哉寿也。」(『藝文類聚』)ともあり、〈老〉が美しきものとして祝福される。〈老〉は〈老醜〉である前に、〈老〉は共同体によって祝福されるものとしてあった。

しかし、憶良の〈世間難住〉はそうした共同体によって祝福されるべき〈老〉の姿ではない。憶良は「沈痾自哀文」でも「是時年七十有四、鬢髮斑白、筋力疋羸、不復加斯病」(『老疾相催、朝夕侵動』)と言ひ、「俗道仮合序」では「人無定期、所以寿夭不同、擊目之間、百令已尽」と言ひ、「老身重病歌」では「老にてある吾が身の上に病をと加えてあれば」(五八九七)と繰り返して〈老〉へのこだわりを見せる。神龜五年に六十九歳、天平五年に七十四歳と考えられる憶良の年令から、このような〈老〉や〈病〉へのこだわりは当然であるかも知れない。しかしながら、現実にある〈老〉が社会的には共同体や律令制に内包され肯定的にあることから見て、その〈老〉が〈老醜〉として意識され、憶良自らの老(老醜)がうたとして表現されるとはどのようなことであるのか。

〈老〉を〈老醜〉として説くものに仏典がある。井村哲夫氏は『仏本行集経空声勸厭本』や『大般涅槃経聖行本』に見える〈老醜〉を指摘する(『憶良と虫麻呂』)。憶良は当該作の序文に排い難きものとして「八大辛苦」を掲げている如く、これは仏典の説く生、老・病・死などの人間の諸苦である。仏典に言う人間の苦の〈老苦〉を憶良はここで捉えているのは事実であり、仏典によって憶良が〈老醜〉を見出したことは理解できよう。ただ、憶良のいう〈老苦〉は仏典の説く〈老苦〉(老醜)を抽出するのみで、そのことによ

る苦の救済は説かれない。仏典の説く〈老苦〉が見出されながらも、それをうたとして表現することはまた別のレヴェルに存したのである。

この〈老〉を文学表現として形成するのは漢文学である。〈老〉が〈寿老〉に象徴される如く祝福されるものとしてあるのは、古代的な共同性へと向かう詩のあり方だが、〈老〉を嘆くといった意識は、むしろ老荘的世界に現われる。老荘は「不老長生」を求めたためにあらゆる長生の為の手段を取りながらも、結局、現実として現われる死に対しては現世での快楽を求めることとなり、また〈老〉を嘆く(嘆老)こととなる。そこに仏教的無常観も受け入れられ複雑な文学思想を形成して行ったのが、中国六朝期の文学であった。

二「哀世間難住歌」の構成員

憶良の〈老〉を嘆くうたの形成は、明らかに六朝文学の〈嘆老〉の詩文を前提としているように思われる。中西進氏は、陶淵明の「雑詩十二首」との関係から憶良の作を説明しているように、『山上憶良』、淵明詩では「人生根蒂なく、飄として陌上の塵の如し」(其二)「日月肯えて遅からず、四時相催迫す。寒風枯条を払い、落葉長陌を掩う。弱質運と頽れ、玄鬢早や已に白し」(其七)と詠む。人生の無常を日月の速やかに過ぎ去ったことや、自らの老身の中に見出し、その〈老〉を青年の時の〈志〉と対応させつつ見詰める。淵明の〈志〉とは現実的な〈立名〉であるが、その立名の挫折によって〈老〉を嘆き、人生の無常を酒を以って撥おうと結論するのである。

漢文学では〈老〉を一つのテーマとして形成していると言える。『芸文類聚』の「老」には「昔類_二紅蓮草_一、自玩_二淥池辺_一。今如_二

白華樹_一、還悲_二明鏡前_一」(簡文帝詩)「少壯面目沢、長老顔色麤、麤醜人所_レ惡」(庾璩詩)「軟顔収_二紅藥_一、玄鬢吐_二素華_一、冉冉逝將_レ老。咄咄奈老何」(陸機詩)の如く、ここでは昔と今との対比の中で、現在の〈老醜〉を嘆く。

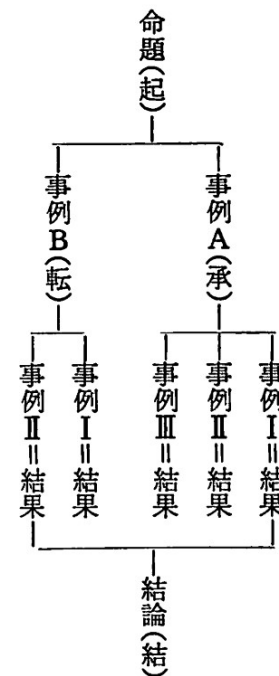
六朝期の文学の中でも、〈老〉を主題にした文学の登場は先の陶淵明よりも百年ほど溯る六朝初頭の陸機(陸士衡)の「歎逝賦」がその一つであろう。「歎逝」とは日月の速やかに去り人の世の過ぎ行くことを傷む(李善)ことだが、この賦はその如く、瞬時に人の生は去り、老がやって来ることを嘆く。昔親しんだ知友や親戚も已に半ば世を去り心楽しまず、若い者と交っても打ち解けることなく、それ故に、死とは明けることのない夜に寝ようなものであると悟って、老の心に起こる煩わしさを解放し老を娛しもうと結論する。陸機の賦は、それまでの漢賦の宮廷性から見て大きな差異がある。陸機の文学には〈天道〉に対する不信があり、〈老〉は決して楽天的な〈寿老〉ではあり得ない。天命に順い安心して生を終えることへの懐疑である。天道は常に遷易し、人生は短命で無常であると捉える。〈天道〉と〈人道〉との合一は中国思想の普遍的な觀念形態であるから、天道に対する不信は自ら道理としてあることへの懐疑として現われる。陸機のこの認識は平面的で写実的な鑽仰の宮廷文学を排し、また具体的な事柄の表現を越えて、形而上的であり本質的なものへと向かう。それだけに、その認識の深さがその表現を支え、論理の屈折が多く見られることになる。高橋和巳氏は、陸機の文学的特色として、〈論〉を以って詩賦を作る傾向にあること、歌い出しに〈鳥敢的〉姿勢〈巨視的〉発想が見られること、日常性と密着や事実記述性が稀薄であることを指摘し、陸機の文学が、所

謂「純粋詩」に近い性格をもっと述べている(『高橋和巳作品集9』)。

この陸機の文学史的位は、ちょうど和歌史の上では人麻呂の宮廷文学を経て、奈良朝初頭の憶良の登場と図式的には偶合する。

ところで、うたが「題」を前提として詠まれるという歌の題の登場は、憶良の一連の作に認められる。殊に神龜五年七月の嘉摩郡撰定の三作は、題・序文・長歌・反歌を一つのセットとして構成しているが、この形態は賦に見られる題・序文・本文・反辞の構成と等しく、賦の形態に倣ったものであることは確かであろう。その結果うたは「題」のもとに統括される表現を可能とし、自ら表現の抽象化・論理化を可能としたように思われる。この表現の問題を前代を代表する人麻呂の作と比較すれば、その現われ方が顕著である。例えば人麻呂の「從三石見國別妻上来時歌」(2二三五)の冒頭は「角障ふ石見の海の言さへく辛の崎なるいくりにぞ深海松生ふる荒磯にぞ玉藻は生ふる」と詠む。この構成は大きい地名「石見」から小さな地名「辛の崎」へ、そしてさらに小さな地点「いくり」「荒磯」へと順を追って移動し、小景の地点から「深海松」や「玉藻」が導かれ、修辭的に鮮明な像を形象して行く。しかし、このように地名を冒頭に提示する方法は一般に多く見られるし、また地名の提示によって事実記述性を表現の中に取り込むことも方法としては多く見られる。人麻呂の場合にはその方法が殊に鮮明に現われているのである。これに対し、憶良の歌の冒頭では「世の中のすべなきものは 年月は流るる如し 取りつつき追ひ来るものは 百種に迫めより来たる」と歌い出され、「世の中のすべなきもの」とは、あたかも「命題」の提示の如き印象を受ける。この「世の中のすべなきものは何か」という問いかけ(懷疑)は、具体的な事柄や日常性

を越えて、形而上的により本質的なものへの問いかけであると言える。従って、その構成は論理性によって支えられている。それを図示すれば次の如きである。



この構成法はむしろ「論」の方法の如く見られる。「論」は、筋道を立てて是非を正確に弁証する方法(劉勰『文心雕龍』)であると言うが、かかる論理性は漢文学の構成法を自明としてあり得る方法であって、陸機の文学が既に達成している。

三 表現史としての「哀世間難住歌」

「老」をはじめにも見たように、いずれの世にもあり続けながら、その「老」は共同体の中で「祝福」されるべき姿として現われ、律令の時代でも制度的には「老」が儒教的に保障されることになる。主題として「老」を嘆く文学は仏教の思想や漢文学という外来の思想・表現との出あいの中でしか可能ではなかった。しかし、「老」の痛苦は共同体の中でも律令制の中にあってもあり続けた筈であり、むしろ「老」が「祝福」されること以上に老の痛苦が現われて然るべきであろう。そうした老の苦が現われずに、「祝福」されるべきものであるのは、共同体や制度が「老」を逆出させているからである。「老」が「寿老」であるとか、あるいは「安恤」「問百年」というのは、現実の「老」の苦を自明の前提としているので

(注) あつて、共同体や制度へ向かう〈老〉は〈祝福〉され〈救済〉されることによつて社会的に露呈するという転倒を見ることが出来る。表現の位相から見るならば、本来老の〈苦〉は前段階に位置づけられ、表出される筈であるのだが、奈良朝初頭に至つて後れて現われる〈老〉への嘆きの表現史の現象は、仏教思想や漢文学によつて共同体や制度の中で自明とされている〈老〉の嘆きを逆出させることになつたのだと考えられよう。〈老〉の嘆きをうたによつて表現することは、そうした二重の転倒の中であり得た筈である。

かかる転倒性は、当該の作も含めて憶良の作が〈雑歌性〉へ向かう表現としてあることと重なるように思われるのである(辰巳『古代文学』21号)。

万葉集の分類の上から見れば、「雑歌」の一つの特徴は最も晴がましい、歌群(古典大系『万葉集一』解説)にある。「晴がましい」歌であるとは、換言すれば〈祝福〉されるべき対象がそこに見出される場合のうたである。〈祝福〉されるべき対象と言うのは、ここでは〈共同体〉や〈宮廷〉や〈天皇〉であり、〈制度〉であると考えられよう。そのような〈祝福〉されるべき対象へ向かううたが〈雑歌〉の特性としてあるとすれば、祝福される〈老〉もまたそうした対象としてあつたのである。だから、憶良の〈老〉への嘆きが〈雑歌〉として現われるのは、〈祝福〉される〈老〉の〈雑歌性〉と逆出する関係の中にパラレルに現われる〈雑歌性〉にあると見られる。そのような関係性の中に〈老〉の表現の〈史〉を認めることが可能であると思われるのであり、そのような逆出を可能としたのが仏教思想や漢文学によつて導かれた〈雑歌性〉にあつたと言ふことであらう。

(注) 自明とされる〈老〉への嘆きとは、前掲の歌を例にすれば、「老奈美」にあつて恋をすることへの驚きが詠まれるのは、「老」に至つては〈恋〉はしないという自明の前提があつてのことだし、次の「於岐那」は「佗び」居ることが前提となつてある如く〈老〉は〈佗び〉ることなのである。竹取翁の序では〈翁〉は娘子らに「からかわれる」姿としてあるのも同じ。〈寿老〉も現実の痛苦や短命への嘆きが前提としてあるのである。

難住——憶良「哀世間難住歌」

東 茂美

一

「哀世間難住歌」は所謂嘉摩三部作のひとつにあたるが、主題としてまず〈無常〉〈世間難住〉が設定されていたものと考えられる。国司巡行の途次に見た老いさらばえた老年者に対し惻隱の情を発したことに起因して、自然の儘にうたわれたものではなく、塵俗の世間についての思弁を重ねるうちに辿りついたのが、〈人間〉存在の深淵に触れる〈世間難住〉というテーマであつたのである。

したがつて、当該歌は「二毛の歎きを撥ふ」べくうたわれたのであり、どのようにうたうかがすべてであつたように思われる。序文に見合うかたちで叙述する骨子を歌に見れば、主張するところは以下の叙述部において殆んどい尽されているみてよいからである。

世の中の すべなきものは 年月は 流るることし とり続き
追ひ来るものは 百種に せめより来たる／世の中や 常にありける／たまきはる 命惜しけど せむすべもなし

にもかかわらず、くりかえし逆説の構成をとりながら、綿々と描写を連ねていくのは、〈表現〉そのものへの憶良の執拗な情念があ